

中学生が手術模擬体験



自動縫合器を使った腹腔鏡手術の模擬手術を体験する中学生

傷口縫合や内視鏡操作

能代厚生医療センター ブラックジャックセミナー

能代市落合の能代厚生医療センター（近田龍一 院長）で10日、中学生が最先端の医療機器を使って外科手術を模擬体験する「ブラックジャックセミナー」が開かれた。能代山本の中学生29人が傷口の縫合や内視鏡操作など外科医の仕事を経験し、医療への関心を深めた。

セミナーは将来医療を志す若者に興味を深めてもらうと、医療機器メーカー「ジョンソン・エンド・ジョンソン」（本社・東京都）が17年から全国の医療機関と協力して開いている。同センターは25年に東北で初めて事業化し、今回で4回目となった。

オリエンテーションの後、青色の手術着を身に付けた生徒たちは、手術室に移動。外科医師やオペ室担当の看護師、研修医らの指導の下、皮膚に模したスポンジを糸で縫

い合わせる縫合作業や超音波メスを使用して鶏肉を切る模擬手術、自動吻合器・縫合器を使って模擬臓器に医療用ホチキスをとめる腹腔鏡の模擬手術などを体験した。

このうち、内視鏡手術を想定した鉗子操作体験では、画面を見ながらピンセットをつまんで移動させたり、輪ゴムを掛けたりする作業に挑戦。最初は悪戦苦闘していた生徒も徐々に感覚をつかみ出し、器用に鉗子を操る姿があちこちで見られた。

生徒の物覚えの早さに指導に当たった医師や看護師らは感心した様子で「外科向きだね」とてもセンスが良い」などと声を掛けていた。

医療従事者の母親がきっかけで医療に興味があるという平川良君（能代一三年）は「傷口を縫う縫合体験が印象的だった。初めてだったけど上手に縫えた」と話し、将来は医療現場で働きたいという。

伊藤菜奈さん（八電三年）は「実際に体験してみると難しいものばかりだったが、将来への思いを強くした」と話していた。

体験終了後は、近田院長から生徒一人ひとりに修了証が手渡された。